

主題役割 Experiencer についての覚書

羽 鳥 百合子

1. はじめに

(1)のような英語の心理動詞の項の θ 役割は何かということについて、前稿(羽鳥(1992))では、Pesetsky(1990)及びGrimshaw(1990)を取り上げながら、主として第一項即ち(1)で主語となっている項の問題を論じた。

- (1) a. The noise frightened us.
- b. The story amused the children.
- c. That theory interested him greatly.

PesetskyもGrimshawも、第二項即ち(1)で目的語として現れている項の θ 役割については、従来通りこれをExperiencerとみなして特に議論をしていない。本稿では、このExperiencerという θ 役割に焦点を当て、果してこれを他の θ 役割と同じように位置づけるべきものなのか、或は異なったレベルの概念と考えるべきものなのか、いくつかの心理動詞構文の分析を通して、考察を試みる。

Experiencerはある感情の担い手であり、通常は、人である。即ち[+Human]の特性をもっていると考えられる。しかし、厳密にどのようなものがExperiencerに含まれるかは、必ずしも明確ではない。例えば、次の斜体部の目的語は、これをExperiencerとみなせるだろうか。

- (2) a. The sight moved *my heart*.
- b. Don't bother *your heads* about me. [K1]

また、次の(3)の心理構文の斜体部を、すべて同じ資格でExperiencerとして分析することは、意味あることなのだろうか。

- (3) a. Mary's behavior offended *her father*.
- b. I fear God.
- c. *She* was angry at John's remark.

以下、次の点を論じたい。第一に、いわゆる心理動詞といわれるものは、(1)及び(3a)のタ

イプのものに限っても、極めて多様であり、その θ 役割は一律には決まらない。むしろいくつかの型に分けるべきである。本稿で θ 役割というときには、語彙的概念構造(LCS)のものと考えている。実際には、LCSはより原始的な意味の単位に分解されており、 θ 役割は意味構造から派生的に生ずる関係概念である¹⁾。しかし、ここでは特に必要がない限り、 θ 役割のラベルを用いて意味構造を表わす。第二に、 θ 役割は異なっても、心理動詞の第二項には共通の特性があり、それを一般化した派生的なものとして、Experiencer という概念は有効である。

2. 心理動詞とは

心理動詞とは、なんらかの意味で人間の感情や心の動きを表わす動詞であると考えられるが、そのような構文は、きわめて多様であり、必ずしも一定の統語構造に結びつくものではない。例えば、Ruwet は、次のような文もなんらかの意味で人間の感情に関わる表現であるとしている²⁾。

- (4) a. That experience reinforced Max in his prejudices.
 b. Mr Verloc was shaken morally to pieces.
 c. L'angoisse habite Paul. 'Anguish inhabits Paul'

一般的には、心理動詞構文という場合にはある統語的なタイプのものを特に取り上げて論じることが多く、本稿でも(1)のタイプに限って考察するが、(4)のような文が存在する可能性は常に念頭においておかななくてはならない。また、(1)タイプの文の中にも、本来の意味から比喩的な拡張によって心理的な意味をもつようになったものが少なくない。例えば、frighten や amuse のような動詞は、始めから感情を表わす表現であり、最も心理動詞らしい心理動詞であるのに対して、上記(2a)の move や、次の例文の touch などは、本来は感情とは関係ない動きを表わす動詞である。

- (5) His kindness touched me profoundly.

では、いかなる点でこれをすべて心理動詞とみなすのだろうか。(1)(3a)(5)には、それぞれ過去分詞及び現在分詞を基にした形容詞構文が存在し、これはすべて感情や心理を表わす表現である。(1)に対しては各々(6)(7)のような構文が対応する。

- (6) a. We were *frightened* by the noise.
 b. The children were *amused* at/by the story
 c. He is deeply *interested* in this theory.
 (7) a. The noise was *frightening*.

- b. It was an *amusing* story.
- c. This theory is very *interesting*.

また、(8)の現在分詞形容詞は、感情を表わす形容詞であり、それ以外の意味での動きや接触を意味しない。

- (8) a. The story was *moving*.
- b. It was a *touching* sight.

(9)の過去分詞も同様である。

- (9) a. I was deeply *moved*.
- b. I am *touched* by your solicitude. [K1]

このような分詞形容詞には共通の特性があり、また極めて *productive* に生ずることから、その派生には、非常に一般性の高い規則が関わっているはずである。本稿における「心理動詞」とは、このような感情を表わす分詞形容詞を生ずることのできるもの、というふうに定義しておく。move や touch は、(8)や(9)が可能であるという点で、そしてそのような意味においてのみ「心理動詞」であると考ええる。

なぜ、move や touch が心理動詞になり得るのであろうか。このようないわゆる意味の拡張の問題に対する解答の糸口を、心理動詞の語彙構造の分析によって見出だせないであろうか。ここでは Jackendoff(1990)に従って、語彙構造はいくつかの意味関係の層(Tier)から成り立っていると考えるが、その中で、場所と移動に関わる Thematic Tier を中心に考察する。

3. Theme としての Experiencer

動詞 move は典型的な移動動詞である。他動詞 move の場合、目的語が移動する物となり、 θ 役割は当然 Theme として分析される。一方、移動先(Goal)は、通常前置詞句または副詞で表わされる。(10)の各項はそれぞれ次のような θ 役割を付与されることになる。

- (10) They moved the chair near the window / away.
- (Agent) (Theme) (Goal)

心理動詞としての move も、動かされるものが物体から人間の心や感情に拡張しただけであり、本質的には同じ意味構造をもっていると考えれば、(10)と(11)は全く同じ型の構文であるということになる。

- (11) The story moved my heart / me deeply.
- (Agent) (Theme)

感情の変化の結果は、to 前置詞句或は不定詞句で表わされることが多い。

- (12) a . The child's suffering moved us *to tears*. [LD]
 b . They were moved *to anger / laughter*.
 c . Hearing so much nonsense, I felt moved *to speak on the subject*. [LD]

斜体部は、いずれも移動先としての状態を表わし Goal として分析することができる。

動詞 stir も原義として move の意味をもっている。従って同じ様な心理動詞的な用法が予測されるが、事実次のように用いられる。

- (13) a . The story stirred the boy's imagination. [OAD]
 b . The story stirred her sympathy. [LD]
 c . His speech stirred us to action. [LD]
 d . He made a stirring speech and everyone cheered. [K1]
 e . Bill looked down upon the girl and felt stirred. [K1]

(13ab) は、その話によってある感情が動かされたことを述べ、(13c) はその結果として行動を起こすに到った (Goal) ことを述べている。(13de) は、stir からやはり心理形容詞が派生していることを示している。(13d) では前置修飾、(13e) では feel の補語になっていることによってそれが分かる。他動詞 stir の本来の用法では、主語は move 同様 Agent であり、目的語は Theme であろう。

- (14) A soft breeze stirred the leaves. [RHD]
 (Agent) (Theme)

従って、(13) も (14) と同様に <Agent, Theme, (Goal)> の θ 構造を取るとするのが、無理のない分析である。ここで、(11) や (13) の目的語だけを Experiencer とするのは (10) や (14) との一般性を見失うことになる。

もし、move や stir が <Agent, Theme, (Goal)> の構造から心理動詞的な意味を派生するとすれば、いわゆる典型的な心理動詞にも、このような意味構造をもっているものがあるのではないだろうか。(15) は、いずれもこのような構造を取る心理動詞の例と考えられる。

- (15) a . The news *surprised* him into tears. [K1]
 b . *awe* a person into obedience
 c . The older boys *frightened* the younger ones into stealing money from their mother's purses. [K1]
 d . The robber's threat *terrified* her into handing over the money. [RHD]
 e . The king's cruelty *excited* the people to rise against him. [K1]

ここで、into 前置詞句、into+動名詞、to 不定詞は、いずれもある感情をかき立てられることによって、結果的にはある動作或は状態に到るということを意味する。(15a-d)の動詞は、その感情が驚きや恐れであることを動詞そのものの意味としてもっているが、(15e)の excite の場合には、次の例にみられるように、むしろかき立てられるべき感情が目的語として現れたり、to 前置詞句として現れたりもする。

- (16) a . Their insults excited *his anger*.
 b . Her new dress excited *envy*.
 c . Their insults excited him *to anger*. [K1]

しかし、いずれも共通に excite の中核の意味として何か感情的なものをかき立てるという意味が存在し、従って動かされるものは Theme と考えてよいであろう。ここで excite が心理動詞として振舞っていることは、(15)の他の動詞と同様に、excited / exciting のような心理形容詞を派生できることによっても確かめられる。

frighten や surprise が最も心理動詞らしい心理動詞であり、move や stir が、その反対に、核になる意味は感情からは遠いものであるとすれば、excite はいわばその中間ぐらいの意味をもつと考えることができるかもしれない。しかし、いずれも共通の意味構造が基になっていると考えれば、心理構文としての共通の特性が説明し易いことになる。 θ 役割として従来 Experiencer と名付けられていたものは、ここではすべて Theme として分析し直すことになる。

4 . Location としての Experiencer

次に、touch の場合を考えてみよう。touch の本来の意味は、ある物がどこかの場所に表面的に接触することである。

- (17) The branches hung down and touched the water. [LD]

上記の例で、the water を場所即ち Location とみなせば、主語の the branches は Theme ということになる。これと平行して、(18)に示されるように、心理動詞としての touch も同じく <Theme, Location> の意味構造をもつと考えられよう。

- (18) a . His kindness touched me profoundly.
 (Theme) (Location)
 b . Her story touched his heart.
 (Theme) (Location)

c. She was touched with pity.

(Location) (Theme)

ここでは、接触する場所が人間或はその心ということになる。従来の Experiencer は Location と分析されることになる。

Experiencer を Location (または Goal) とみなす考え方は、今までにも度々示されてきた。Jackendoff (1990) は、“tentative analysis” としながらも、(19a) のような心理動詞の Thematic Tier として (19b) のような θ 役割の可能性を示している³⁾。

(19) a. Louise/The news frightened Fred

b. Actor/Agent, Patient/Goal:

ここで、いわゆる Experiencer に相当する項を Goal とみなす分析が提示されているが、更に Jackendoff は、次のような述べ方をしている。

Still another problem is the analysis of psych-verbs, which has been only minimally justified here. Specifically, the role standardly called Experiencer is treated here as a Location or Goal on the thematic tier: The Experiencer is the location of the fear, pleasure, and so forth... (p.262)

即ち、ニュースが Fred を怖がらせたということは、ニュースによって Fred に恐れ (fright) がもたらされた、Fred に恐れが存在することになったという意味に分解され、Fred が Goal または Location であるということを示唆している。

しかし動詞 frighten の場合、(19b) のように分析してしまうと、前節で挙げた (15) の例のような into 前置詞句の θ 役割は何かという問題が生じるであろう。(15) と (19a) の frighten は別々の θ 構造をもつということになってしまうかもしれない。これは Jackendoff が意図する方向ではなかろう⁴⁾。frighten の Experiencer を Location または Goal とするのは、適当ではないと考える。

以下本節では、目的語が Location になる場合として、むしろ fill 型の動詞と心理動詞を関係づける可能性を探る。

(20) a. Water filled the tank.

b. Snow covered the ground.

Jackendoff (p.160) は、このような動詞の概念構造は概略次のようなものであるとしている。

(21) [Event_INCH [State BE ([Thing], [Place])]]

これにより、(21) の主語は Theme、目的語は Place すなわち Location となる。Theme は、次の例にみられるように、with 前置詞句とも結びつけられる⁵⁾。

- (22) a . Bill filled the tank (with water).
- b . The tank filled (with water).
- c . The ground was covered with snow.

ここでは、何かの物体によってある場所がいっぱいになる、或は覆ってしまうという関係を表わしているわけである。

ここで、上記のある場所に相当するものが人間の心である場合に心理動詞として振舞うことが予想される。思いつく動詞の例として *satisfy* と *preoccupy* を見てみよう。

- (23) a . The hearty meal satisfied him. [RHD]
- b . The problem ceased to preoccupy his mind. [RHD]
- c . Something's being preoccupying you lately—what is it? [LD]

(23a)では、心のこもった食事=Theme が彼(の心)を満たし、(23b)では、その問題が彼の頭を占領する即ちいっぱいにするを問題にしている。もっと心理動詞らしい心理動詞を考えてみると、*worry*, *embarrass*, *disappoint*, *trouble* なども何かについての心配、困惑、失望が心を占めていることを表わす動詞と考えることができる。このような動詞の典型的な特徴として、*fill* でみたように Theme を前置詞 *with* を用いて表わすのが最も普通のようなものである。上記の心理動詞はいずれも *with* 句を伴うことができる。

- (24) a . He was satisfied with the hearty meal.
- b . They were preoccupied with the thoughts of the coming holidays.
- c . Don't worry me with so many questions.
- d . I was disappointed with the book when I had bought it. [K2]
- e . He is troubled with a nasty cough. [K2]

最初に取り上げた *touch* も *with* 句を伴うことは(18c)で見たとおりである。

従って本節で取り上げた心理動詞は、いずれも〈Theme, Location〉の θ 役割をもつものとして一般化することができ、Theme は同様の意味構造をもつ他の動詞(例えば *fill*)と同じように *with* 句と結びつく。

5. 心理動詞の分類

第2節では、心理動詞が〈Agent, Theme, Goal〉を取る場合、第3節では、心理動詞が〈Theme, Location〉を取る場合をみた。従来の Experiencer に相当するものは、前者では Theme、後者では Location ということになる。

この2つのタイプの心理動詞はそれぞれ異なった意味構造をもつのであるから、お互いに交換不可能であることが予測される。事実、後者に属する動詞に Goal をつけると容認しにくい文が生ずる⁶⁾。

- (25) a. *The news satisfied her into joy.
 b. * ? The problem worried her into sickness / headache.
 c. * ? The sight touched her to tears.

インフォーマントの一人は、(25b)は sickness の方はややよさそうであると言い、別の一人は、(25c)は move と同じように解釈できるかもしれないと答えた。しかし、いずれもかなり無理をすればという感じであった。

一方前者のタイプの動詞に with 句をつけるのは、どうであろうか。

- (26) a. ? Fred was surprised with the news.
 b. *The boys were frightened with the magician.
 c. *She was terrified with the robber's threat.

インフォーマントの共通の答えとして with は “strange” であり、by または at が望ましいということであった。但し、二人のインフォーマントは(26a)はそれほど悪くはないということであった。この点については次のことに注意する必要がある。英語の with 句は、必ずしも常に Theme を表わすとは限らない。典型的な用法は手段・道具である。(27a)はその例として分析することもでき、(27b)の with 句も同様に考えることができるだろう⁷⁾。

- (27) a. They surprised her with a birthday party. [K2]
 b. She was surprised with a birthday party.

また、形容詞化した過去分詞は、元の動詞が取らなかった前置詞と共起する可能性がある。

- (28) a. *The movie/John frightened Mary of the ghost.⁸⁾
 b. Mary was frightened of the ghost.

(28a)が示すように、動詞 frighten は、of 句と共起しない。しかし、(28b)は可能であり、これは、形容詞化した frightened が形容詞 afraid と同様に恐れの対象を of 句で表わすようになったと考えられる。形容詞化した terrified が of 句を伴うのも同様であろう。従って、過去分詞形容詞が with 句と共起している場合も、元々 with を伴う心理形容詞(例えば angry)の影響がないとは言えない。前置詞句によって心理動詞の意味構造を分類する場合には、上記のような点を考慮に入れなければならないことは確かであろう。しかし、(24)の心理動詞がごく自然な前置詞として with を選んでいるのに対して、(26)がかなり不自然であることは説明されなければならない。本稿では、それを意味構造の相違として捉える試みを示した。

本節では、もう1つ Experiencer を Theme と分析できる例を見てみよう。第3節の例では Theme に後続する項が Goal であったが、それが Location になる場合である。動詞 *interest* がその例と考えられる。

(29) a . He interested his friend in outdoor sports. [K2]

(Agent) (Theme) (Location)

b . His friend is interested in outdoor sports.

(Theme) (Location)

ここでは、「友達が戸外のスポーツに興味を感じるようにした」ということで、*his friend* が Theme, *in outdoor sports* が Location であると分析できるだろう。類似の動詞として、*involve* が挙げられるが、この場合の中核の意味は、何か物または人 (= Agent) が誰か (= Theme) をどこかに (= Location) 巻き込むということになる

(30) a . One foolish mistake can involve you in a good deal of trouble.

(Agent) (Theme) (Location)

b . He was so involved in his work that he refused to go home.

(Theme) (Location)

(30a)は本来の *involve* の意味に近い用法であるが、(30b)になると巻き込まれているのは彼の関心である。つまりそこから熱中するという心理動詞的な意味が生じている。但し、*interest* には完全に形容詞化した分詞形 *interested* 及び *interesting* が対応するのに対して、*involving* という心理形容詞は使われず、始めの定義に基づけば、*involve* が心理動詞となりきっているとは言えないかもしれない。

6. Experiencer とは

ここまでの考察の中で、従来 Experiencer を目的語に取るとみなされてきた心理動詞構文が、少なくとも Thematic Tier においては、すべて同一の θ 役割をとるとは考えない方がよいのではないかという主張をしてきたことになる。ここで取り上げた動詞はごく一部のものであり、より多くの心理動詞の詳細な検討が必要なことは言うまでもない。

それでは Experiencer とは何か、全く不要な概念なのであろうか。これまで見てきた例文の中で、心理動詞と見なせるものの目的語には共通の特徴がある。それは「人」または「人に所属する感情を感じる部分」または「感情」そのものということになる。当然第一の「人」を表わす表現が圧倒的に多いのであるが、第二の「感じるところ」の例としては(2ab)の *move my*

heart, *bother your heads*, (18b)の *touch his heart*, (23b)の *preoccupy his mind*が挙げられ、更に次のようなものを加えることができる。

(31) a . Then we don't have to worry *our heads*.

b . *My soul* is grieved to death.⁹⁾

第三の「感情」を表わす表現の例としては、(15ab)の *excite his anger/envy*, (13ab)の *stir the boy's imagination/her sympathy*, 及び次のようなものもそれに当たる。

(32) a . Have I hurt *your feelings* ?

b . It soothed *his anger*.

「感じる場所」も「感情」もいずれも「人」の譲渡不可能な所有物 (inalienable possession)である。そして、ほとんどの場合「人」が所有格の形で顕在化している。もし、Experiencerを [+Human] とするならば、それは心理動詞の項そのものとして現れる場合もあれば、項の一部即ち指定部として現れる場合もあるということになる。例えば、(31)において *our*, *my* が各々 Experiencer ということになる¹⁰⁾。しかし一方、心理動詞の目的語に「人」を取る場合でも、厳密に意味を考えると、心理的な影響を受ける場所は、人の心や精神であり、感情である。I was moved. と言った場合、感動したのは「私の心」であり、I was attracted/interested. と言った場合も、引きつけられたのは「私の関心・興味」である。言い換えると、心理表現の場合、「人」=「感じるもの」であり、どちらが選択されても同じ様な意味をもつのである。Experiencerとは、この様な性質(漠然とした言い方ではあるが、Psych性と呼ぶことにする)をもったもの、即ち「人」=「感じるもの」に与えられるべき総称的ラベルであると考えられる。

これを捉える意味構造としては、Jackendoff(1990)が示唆しているように Action Tier における Patient が適当であろう。JackendoffはAFFという関数にいくつかの記号を付与し、ActorとPatientとの意味関係の様々な側面(例えば行為者の意志の有無など)を捉えようとしているが、何らかの方法でPatientにPsych性があるかないかを表示する必要があるのではないか。このPsych性によって、従来から問題になっている frighten 型動詞の特異性や、分詞型心理形容詞の派生の方法が説明できるかもしれない。例えば、現在分詞形容詞の派生には、内項即ちPatientが投射されないことをいずれかのレベルで説明しなければならないが、その際に、Psych性が関与するかもしれない¹¹⁾。現在のところいずれも可能性の域を出ず、意味構造の精密化と論証が必要である。

7. むすび

本稿では、従来 Experiencer を目的語に取るとされてきた心理動詞構文の意味構造を考察することによって、いわゆる frighten 型の動詞は、少なくとも3種類の異なった Thematic Tier をもつことをみた。即ち、〈Agent, Theme, (Goal)〉型、〈Agent, Theme, (Location)〉型、〈Theme, Location〉型である。第一の型をとる動詞としては、上記の frighten, surprise, terrify, awe, excite, stir, move の他に inspire, stimulate なども挙げられる。第二の型をとる動詞としては、interest と involove を挙げた。intrigue もここに含まれるであろう。第一の型と第二の型は一つにすることも可能であろう。第三の型をとる動詞としては、disappoint, preoccupy, worry, trouble, touch の他 delight や bother なども含められよう。ここに列挙した動詞の中には、典型的な心理動詞即ち感情を表わす名詞 (fright, worry, surprise, delight など) が意味の核にあるものから、move や touch のように、本来の意味はほとんど心理とは無関係なものまで含まれている。しかし、同じ意味構造を共有していることから、同じように心理動詞としてふるまう事実の説明がしやすくなる。また、Experiencer を Psych 性をもった Patient と考えることにより、my heart のような表現の位置づけも可能になるだろう。Psych 性は更に、(3bc)の主語にも付与されるべき性質であると考えている。また、(4)のような構文の項にも、いずれかのレベルで与えられるべきものかもしれない。

注

1. Rappaport and Levin (1988) 及び Jackendoff (1990) 参照。また、Grimshaw (1990: 43-44) も、便宜的に Exp というラベルを用いているが、項構造では階層関係のみを問題にし、 θ 役割は本来は語彙概念構造上のラベルであるとしている。
2. 例文(4)は、1992年6月6日の日本言語学会における Nicolas Ruwet 氏の講演 “Psych-verbs and the notion of intentional subject” のハンドアウトより。
3. この他にも例えば、Verma and Mohanan (1990) は南アジアの多くの言語で Experiencer が与格をとる事実を紹介し、これを goal や location と結びつけている。
4. Jackendoff は動詞 force の次のような文に対して、roll NP PP と同じように PP は [_{Path}] 即ち Goal / Source をとる前置詞句と考えている。
 - i) Bill forced the ball through the hole.frighten も force と類似性があり、これを何らかの方法で捉える必要がある。
5. これは、With Adjunct Rule という linking 規則によって結びつけられる。
6. 例文(25)(26)の文法性の判断については、Francis Bosha, Larry Hanson, Janet Johnson, Paula

- Ocallaghan の各氏の協力を得た。インフォーマントとしての貴重なコメントに感謝する。
7. 但し, Rappaport and Levin(1988)では, Instrument は一種の Theme であるという可能性を示している。
 8. Grimshaw(1990)は, (28a)を同じ θ 役割が二つ共起していて排除される例と考えているが, 主語が John の場合にはうまく説明できていない。羽鳥(1992)参照。
 9. このように「感じるところ」が主語になる例は少ないが, 次のものもそうである。
(i) *My mind is preoccupied with private cares.* [K2]
 10. Roberts(1989)は, heart のような身体部分を表わす名詞は, Experiencer を与格の項として取るという分析を示している。従って, *my heart* は [NP *my heart* t] のように移動の結果生じたものとしている。
 11. 心理形容詞としての現在分詞形容詞の派生については, 羽鳥(1992)で触れている。

参考文献

- Grimshaw, J. (1990) *Argument Structure*, MIT Press, Cambridge.
羽鳥百合子(1992)「心理動詞の語彙構造」『川村学園女子大学研究紀要』第3巻第2号, 87-102.
Jackendoff, R. (1990) *Semantic Structures*, MIT Press, Cambridge.
Pesetsky, D. (1990) "Experiencer Predicates and Universal Alignment Principles," unpublished ms., MIT
Rappaport, M and B. Levin (1988) "What to Do with θ -roles," in Wilkins ed. (1988) *Syntax and Semantics* 21, 7-36.
Roberts, I. (1989) "Compound Psych-Adjectives and the Ergative Hypothesis," *NELS* 19, 358-374.
Verma, M. K. and K. P. Mohanan eds. *Experiencer Subjects in South Asian Languages*. SLA Stanford.

例文出典

- 小西友七編『英語基本動詞辞典』研究者出版 [K1]
小西友七編『英語前置詞活用辞典』大修館 [K2]
Longman Dictionary of Contemporary English [LD]
Oxford Advanced Learner's Dictionary [OAD]
Shogakukan's Random House English Japanese Dictionary [RHD]